

六本木で出版記念

ここに一人のアルトサクソフ奏者がいる。名前を沢田一範といふ。まったく無名の新人である。

お話は五年ほど前にさかのぼる。東京の仲間たちが『ジャズが若かったころ』を出版したのを記念して、六本木の

△(8)▽



「ピットイン」でパーティーを開いてくれた時のこと。深夜から始まったこの会に、思いがけぬほどたくさんミュージシャンたちが、楽器片手に集まってくれたが、ギター、の宇山恭兵もその一人だった。

一九六〇年代の初め「銀座里(銀座のシャンソン喫茶)」

にこもって活動し、僕自身も顧問として参加した「新世紀音楽研究所」(菊地雅章、山下洋輔、日野明正らは、ここから巣立っている)の一員だった宇山は、まじめな性格を買われて会計係でもあった。

彼のリリカルなフレーが、とても好きだった僕は「久しぶりで本当に懐かしいねえ。今どこでやっているの?」。

「最近はずまいのある茅ヶ崎近辺で、若い人とグルーブをつくってやっています。テープに入れて送りますから、一度、聴いてみてくださいませか?」

本格的なピバップ

そんな会話も、いつの間にかやが忘れかけた昨年の暮れ、思い出したように、一本のカセットが送られてきた。驚いたことに、これが昨今、珍しい本格的な「ピバップ」だったのだ。

中でもアルトは音色もよく、スピードもある上に、むずかしいパーカーの曲を、狂いなく吹いて注目に値した。

沢田という名前が聞いたことさえないが、楽しみな素材に

は違いない。

電話に出た宇山は、「いいアルトでしょう? 十年以上もニューヨークオーケストラでやってたんで、三十六歳になるんですよ。信じられま

音色もよく正確な 沢田一範のアルト

らく歌の伴奏を主とする日常は、ともすれば情性に流れても不思議はない。厳しい緊張感を不可欠とする、ジャズへの情熱を燃やし続けるのは、並の意志では不可能だ。

そうと聞くとうろっておけないのは、いいのか悪いのか。

二夜にわたって全十六曲のレパートリーを熟演じた。瀬川映子の「伴奏」、初めての名古屋で、まじめに聴いてくれるジャズファンたちを前にして、よほどうれしかったんだろうねえ。



つづめるようにお願いした。いつの日にか実を結ぶと、当にうれしんだけれど、...のための資料に奥さんにと、のんびりしててよったなあ。

「あら、楽器持っている写真なんてあったから。そつ

これからの活躍が楽しみなアルトサクソフの沢田一範一名古屋

すか?。うーん、以前、芸能界の裏話を書いて話題になったダン池田という人が、リーダーだったはずだから、ジャズができる環境でもなさそうなのに.....

早速、テープをコピーして、週末の楽しみにしている名古屋のジャズスポット「ラヴリ」に持参した。勘のいいオーナーの河合君、ニヤリとします。『呼べばいいんでしょう?』さすが、分かっている。

そうと決まれば早い。三月で前向きなディレクターにレーヤーが吹いているのを存じかなあ? (内田 修